

新築保育園における環境移行に関する研究

- 園児の社会性獲得と空間との相互関係についての研究その5 -

子ども 環境 保育園
遊び 行動 移行

正会員 ○佐藤 将之*
同 渡辺 治**
同 西出 和彦***
同 高橋 鷹志****

■目的

保育園において子ども達は、初めて保育者や園児という家族以外の人々と生活を共にすることで、種々の人間集団の中で、社会の一員として生きていく為の社会性を獲得していく。そして近年、生活の中での遊び場の減少や、社会進出する女性の増加など、社会や教育の変化により、保育施設は、一段と重要性を増してきている。

本研究では、新築の保育園における、園児達の環境との関わり方の時間的変化を分析することで、環境移行の様相を明らかにし、本研究を環境デザインを行う上での基礎的研究として位置づけると共に、環境を設定する建築家や園側の役割を検討することを目的とする。

■調査概要

建築家と園側の話し合いにより、意図的に園児の身体寸法に合っていない物理的環境を創り出した保育園である、東京都日野市の至誠第二保育園万願寺分園において、通園を開始した2001年4月3日より、観察調査を始めた。本園から来た園児は年齢ごとに1名程で、ほとんど知らない園児達が、全く新しい物理的、社会的環境を体験していくという状況である。3歳以上児は12名、3歳未満児は20名。現在増加中で最終的には、全体で40～50名を収容する予定であるという。

調査は、筆者自身が単独で行い、カメラマンとして、園児達に紹介していただいた。

4月は、土日が休園で週5日という通園の状況下において、通園開始日より、7日間連続で調査を行い、以後は週2回、6月以降は、月1回で、調査を継続している。

■物理的環境との関係

①各箇所の使いこなし～使いこなす為の過程

靴棚:決められた自分の棚を探して履き替える為には、(1)どの列か【探索】(2)棚の扉の開け方【行為】(3)どの段か【探索】(4)棚の扉を閉じる【行為】、という一連の探索と行為があった。その一連の流れを習得するまでには、**棚の扉の開け方がわからない→段は覚えても列を間違える→棚の扉を閉じるのを忘れる、**



写真1. 動作を一つずつ父に確認する園児

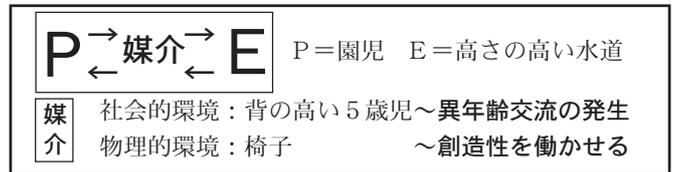


写真2. 椅子を持ってきて、皿洗いをする園児

というような段階が存在し、できるようになっても数日は、父母の顔を見て確認を行っていた(写真1参照)。

給食の皿をさげる為の流し:将来的な地域への開放などから大人も使えるようにと、70cm(5歳児のみが背伸びをせずに使える高さ)に設定された。ここでは、(1)簡単に洗浄することのできる5歳児が自ら、背の低い園児の分を受け取って洗浄する場面が見られたり、(2)椅子を持って来て、洗浄係を買って出る園児(2,3人で行うことで一つのごっこ遊びになっていた。)が発生したりしていた。(写真2・表1参照)

表1. 流しにおける人間-環境関係～写真2



その他に、ドアやサッシの開け方、蛇口のひねり方、等の試行錯誤や、上履きだと滑って転んでしまうテラスでは、裸足で遊ぶようになる、などの移行も観察された。

②遊びにおける物理的環境

～誘導発生的遊びから自然発生的遊びへ

園児が園内の環境を自由に選択できる状態にあった時の物理的環境選択と遊び始めの様子を表2に示す。

物理的環境選択は、設定されていた環境で遊ぶという、受動的な、誘導発生的な遊び場面から、環境を自分で設定するという、積極的・能動的な、自然発生的な遊び場面へと移行していくことがわかった。

また、遊び始めに関して、第1週では、「立位のまま(写3)」 「数十秒で移動」という、環境を探る様子が多かったのに対し、第3週では、「一目見る」・長時



写真3. 立位で遊び始める園児

表2. 遊びにおける物理的環境の使いこなし

	第1週	第3週
物理的環境選択の様子	・保育士が用意していた遊具や、道具が準備されている砂場で遊ぶ。	・保育士に、その日に設置されて居なかった自分が遊びたい遊具を要求する。 ・何も設定されていないテラス奥で滞留する。
遊び始めの様子	・立位のまま遊具を触り始め、数十秒でまた別の遊具へと移動していく。	・一目みただけで、通り過ぎる。 ・十秒ほど触ると、座位で遊び始める。

間「座位」といった、経験に基づいた遊び環境の使いこなしがみられた。

■社会的環境との関係～関係の構築

一週目は、一人あるいは二人程度で遊んでいる姿が多かったが、三週目辺りからは、4名程度の遊び集合が発生し、砂場では「みんな、やれ！」という指揮をとる園児も現れた。遊び集合が発生すると、参加していない3歳未満児が傍観をはじめ、同じような作業を傍らで始める、模倣する姿が見られた。

親と離れる際の涙が、初めは半日だったのが、数十分、そして二週目後半からは、泣き始めた園児に保育士が、「Aしよう！」と言うだけで泣きやんで遊び始める姿が見られた。この時のAは、一週目において保育士が、個々に異なる泣きやませる為の遊具や話題を、試行することで認識されていた。(Aの例：しゃぼん玉・球が転がる遊具など。)

母親の手を離れる際になかなか泣きやまなかった園児達には、特定の保育士と愛着関係を構築しそれから様々に関係を構築する型、兄弟と遊びながら徐々に他と関係を構築する型、など段階的な関係構築が存在していた。



写真5. 第1週での園児の点在
図1. 社会的環境の関係の移行



写真6. 第2週での遊び集合



■園側の対応

①より誘導しやすい方向へ

昼食：初めは自由に座っていたが、昼食が遅い園児を固めて座らせ、そのそばに保育士が座り、時間と相談しながら手助けするようになっていった。

昼寝：昼寝は、二週目から始まった。0歳児・1～2歳児・3～5歳児という三組を、初めは窓の少ない部屋や暗いところな

ど、点在した三カ所で行っていた。しかし、寝付かない時がそれぞれに存在し、それを互いの保育士が助け合う為、明るさなどは関係なく、互いの昼寝状態が把握できるように、それぞれの昼寝場所を連続させていった。

このようなことをはじめとして、より誘導のしやすい方向へと移行していく様子が見られた。

②保育場所の移行～段階的な配置替え 図2~4参照

2歳児が、机・椅子のある環境で仕事(ノート大などの遊具)に取り組むため、そして、新しい年度に3～5歳児クラスに入っていくための段階として、図3から図4のように、クラスの拠点が変化した。

クラスの領域を示すために柵が配置され、図4の2クラスの互いに行き来できるようになっている。

■園児の環境移行との関わり

コミュニティの欠落や少子化問題などで近年減少しているといわれている「異年齢交流」が、流しを利用する為の解決策として、五歳児と低年齢児の間に発生していたことなどから、今回の調査では、「使いやすさが大切とは限らない。発生する問題を解決する過程や工夫こそが大切。」と語る園長の保育理念に基づいた設計者との話し合いが、上記の様な交流や新しい遊び場面の発生という成果を得ているといえよう。

園児達は、自分たちができないことに直面していた時でも、父兄に正誤の確認を求めたり、「一緒に〇〇しよう」などという保育士側からの提案に応じて、新しい環境へと取り組む姿が見られた。ゆえに建築家や園側は、環境を設定するだけでなく、「一緒に」という言葉を投げかけることで取り組む姿勢を促し、どうすれば解決できるか考えさせる機会を与えることで、共に達成することが、それができない者への介助や伝えあいのできる園環境を生み出す第一歩であるといえよう。

今後の展開としては、①今年度から、園児数が約1.4倍に増える中で、園児の中や園児と保育士の関係やその中の規範がどのように変化していくのか、②図4の2歳児領域から、3～5歳児の領域に入り込んで、傍観・観察を行っていた園児が、どのような役割を担っていくのか、ということなどを述べていく予定である。

参1：佐藤・村田・高橋「遊び集合の共存と伝えあいの仕組みについて」(日本建築学会2000年大会学術講演梗概集)

参2：村田・佐藤・高橋「保育園における園児交流と環境のアフォーダンスの関係について」(日本建築学会2000年大会学術講演梗概集)

参3：佐藤・高橋「遊びにおける関係移行に関する考察」(日本建築学会2001年大会学術講演梗概集)



図2. 第1,2週の年齢別保育の場所



図3. 第3週以降の年齢別保育の場所



図4. 11月の年齢別保育の場所

*1 東京大学大学院工学系研究科 博士課程・工修

*2 渡辺治建築都市設計事務所 代表取締役・工博

*3 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 助教授・工博

*4 東京大学 名誉教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Eng., The University of Tokyo, M.Eng. Representative Director., Osamu Watanabe Architects Dr.Eng.

Assoc.Prof., Dept. of Arch., Graduate School of Eng., The Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

Professor Emeritus., The Univ. of Tokyo, Dr.Eng.